

# 『三才図会』の雙陸盤面図について

木子香<sup>†</sup> 張 超然<sup>†</sup> 徐 恒遠<sup>†</sup> 高見友幸<sup>†</sup>

<sup>†</sup>大阪電気通信大学総合情報学部

キーワード：三才図会 雙陸 盤双六

## 1 はじめに

中国の古代盤上遊戯である雙陸（ジャンル・盤双六）は歴史が古く、シルクロードを往来したソグド人の商人が西方から伝えたとされている[1]. 雙陸は三世紀に中国に伝来してから十九世紀清の時代に滅びるまで、千年以上に渡り遊ばれ続けてきた[2]. 中国には雙陸に関する古代書籍の文献が多く存在するものの、雙陸遊戯法について書かれているものは殆どない. しかし、1151年、中国南宋の知識人洪遵(1120~1174)によって雙陸専門書『譜雙』（ふそう）が世に出された. 『譜雙』は図版が豊富であり、雙陸初期配置や遊戯法も図と文章で説明されており、当時の雙陸を知る上で大変貴重な資料である. 近年、十七世紀中国明の時代に編纂された『三才図会』の中から9枚の雙陸盤面図が掲載されていることがわかった. これまで『譜雙』以外に雙陸に関する文献には図版が殆どない中、この9枚の盤面図は雙陸遊戯法の変遷の研究において重要な手がかりとなるものである. 本稿では、この『三才図会』に掲載されている盤面図を紹介しながら当時の遊戯法について分析していく.

## 2 雙陸盤面および名称について

中国の雙陸は北雙陸と南雙陸に分れており、遊戯盤盤面のデザインや名称も異なり、同じ事柄に対して、複数の言い方が見られる[3]. 北雙陸盤面にはマス線が描かれておらず、代わりに「梁標」という丸い印で表している. 南雙陸盤面にはマスが線で描かれており、盤の中心にある「六頭屋」マスには、対角線で引かれている. また、南北盤面の各名称も異なるが、どちらも盤の中心から左右に六マスになっており、全部で24マスの盤になっている（図1, 2）. これは日本盤双六の盤面マ

ス数と同様である（図3）. 雙陸の各種名称について日本盤双六名称と対照し、以下の表にまとめる（表1）.

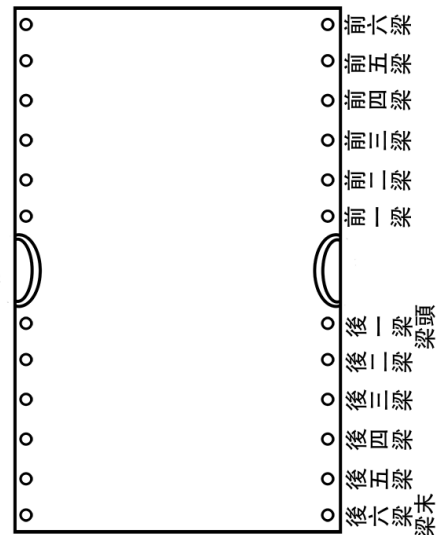


図1 北雙陸盤面

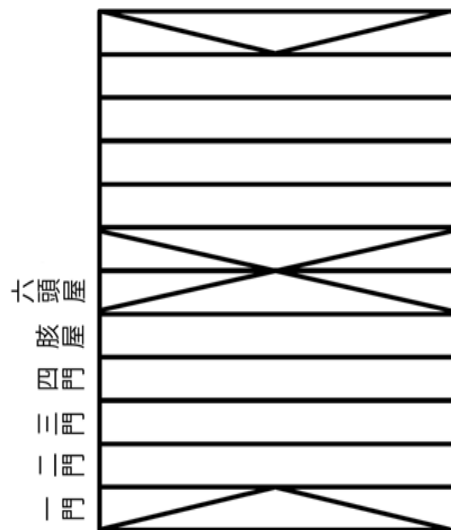


図2 南雙陸盤面

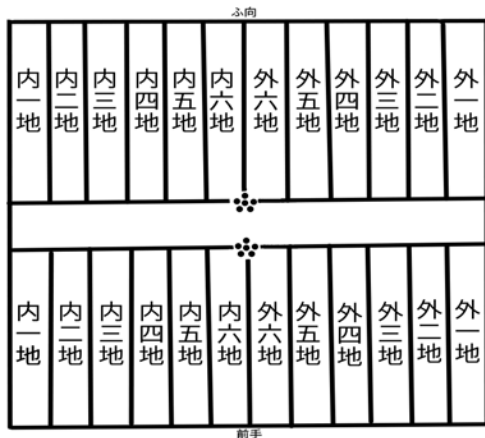


図3 日本盤双六盤面

表1 日中盤双六名称対照

日本	中国
石 (駒)	馬
石飾り (初期配置)	布局 (初期配置)
地 (マス)	梁 (北雙陸) 門 (南雙陸)
外地 (外一地～六地)	前一～六梁 (北雙陸) 外一～六門 (南雙陸)
内地 (内一地～六地)	後一～六梁 (北雙陸) 内一～六門 (南雙陸)
自陣 (内一地～六地)	宮 北雙陸の後一～六梁 南雙陸の内一～六門
賽・賽子・骰子 (サイコロ)	骰子・彩 (サイコロ)
一荷 (一つのマスに自分の駒を二つおいた場合)	両子相比 (北雙陸) 做屋 (南雙陸)

また、骰子の出目の呼称について、日中共にゾロ目の場合は数字の前に「重」を加える。例えば、1のゾロ目は「重一」、2のゾロ目は「重二」のように呼ぶ。4のゾロ目は「重紅」と呼ぶが、中国の骰子の4の目は赤く染められているからである。

### 3 『三才図会』の盤面

『三才図会』は、中国明の時代に王圻（おうき、1530-1615）とその子王思義（おうしぎ）により編纂された明時代の経典的類書である。全106巻からなり、「天文」「地理」「人物」など14部で構成されている。『三才図会』は、膨大な内容と多様な版画挿絵があり、中国古代版書の傑作とも言われている[4]。この『三才図会・人事十卷』には雙陸の項があり、9枚の盤面図が描かれている。図の上や図の中に、盤面図を説明する文章や歌もある。先述の『譜雙』の中にも各種初期配置が図で描かれているが、『三才図会』の盤面図には、『譜雙』と異なる部分が見られる。

『三才図会』盤面の「梁標」は「門」の上下に5個描かれ、全部で20マスになっている。このような20マスの盤面図は、現在日中文献の中に類をみない。これに関して次の節で説明する。

#### 3.1 雙陸盤式

図の上部に書かれた文の大意：骰子の出目で先手を決め、一定のルールに従いながら、プレイする(図4)。

図4の盤面の上に「北為内家」「南為外局」と書かれており、これは、北エリアを「内家」と称し、南エリアを「外局」と称するという意味である。盤面の中心部に三日月のような形をしている「門」があり、「門」の上と下に「梁標」が印されている。盤の中央に「中河」の文字が書かれている。更に、盤面には「逢門不作家」「此是外華」の記述がある。

「此是外華」というのは、南エリアは「外華」ともいい、「逢門不作家」は門の場所には馬を置かないと理解するのが正しいであろう。馬は白黒各15個配置され、『譜雙』の常局格制や日本盤双六の「本双六」の初期配置と同じ並べ方である。この「雙陸盤式図」は『三才図会』雙陸の項に描かれた最初の一枚目である。上記の解析により、この図は雙陸の初期配置を表していることが分かる。盤面の

上には南北の方向が示されている。読者から見た盤は、上は北、下は南となっている。盤面図をよく見ていくと、門の上下は「梁標」が5個ずつしかない。この盤面図は前後五梁である。



図4 雙陸盤式

### 3.2 外華平満局

図の上部に書かれた文の大意：前四梁外華平満局、後の梁を「内榮梁」といい、前梁を外華および常作という。骰子の出目が重四の場合は馬を四梁に置く。所謂外華なり（図5）。

この文から分析していく。「門」を中心として南の外華にある梁は前梁、北の内家にある梁は後梁または内榮梁と称するということである。つまり、南を前、北を後ろとする見方である。図5を見ていくと、「外華平満局」は「雙陸盤式」の馬の並び方と違い、前一梁にある五つの馬の二つは前四梁に移動したことがわかる。全体の馬数を見ると、黒は15個あるが、白馬は13個しかない。通常の15個から計算すると馬は二つ足りない。また、前四梁にある黒馬と向かい合わせの場所に、白馬は1個しか描かれていないが、文章から推測すると、ここはもう一つの白馬があるべきである。また、前五梁にある白馬は一つ足りないが、これも上記

と同様である。この盤面図は前後五梁である。



図5 外華平満局

### 3.3 三梁外華定局

図の上部に書かれた文の大意：前三梁の外華で配置。骰子の出目が重三の場合は、馬を外華三梁に配置する（図6）。

図6の盤面には「三のゾロ目の場合は、一梁にある五つの馬の中から前三梁に配置する」と書かれている。

盤面から、前一梁の白黒馬を各二つずつ前三梁の場所に配置したことが分かる。また、図で描かれた馬の数は、白馬が16個、黒馬が14個である。後一梁に白黒の馬が混在している。「雙陸盤式」から考えると二つとも黒馬であるのが正しいと考える。この盤面図は前後五梁である。

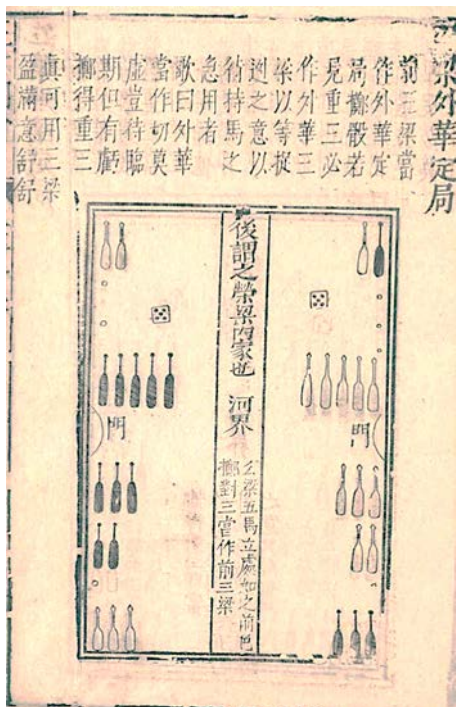


図6 三梁外華局

### 3.4 二梁外華定局

図の上部に書かれた文の大意：前二梁は外華定局にする。骰子の出目が重二の場合は，外華に配置する（図7）。

図7は外華前一梁にある五つの馬のうち二つを前二梁に移動したものである。図6と同様に後一梁に白黒の馬が混在しているが、「雙陸盤式」図から考えると，二つとも黒馬であろう。また，この図では後梁が六つあるようにも見えるが，これも印刷上の間違いだと考える。

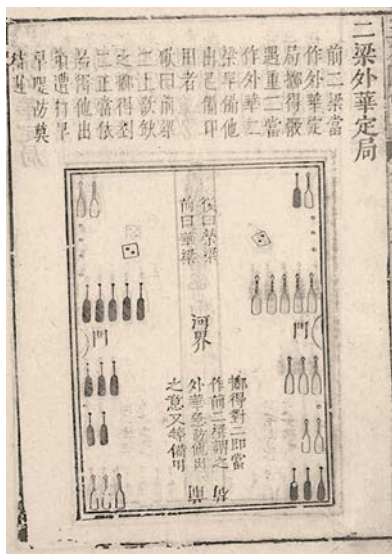


図7 二梁外華定局

### 3.5 蔵馬定局

図の上部に書かれた文の大意は：「把門」（バモン）できてない状況の下では，骰子の出目が五の時，前一梁にある五つの馬の場所に馬を一つ隠し，前一梁に馬を六つ置く。所謂蔵馬定局（図8）。

『譜雙』によると，北方雙陸は前一梁を「門」という，馬二つが門にたどり着くと「把門」という[5]。また，『譜雙』の中に記載されている北雙陸盤の「前一梁」は三日月の形をしている「門」と隣接している梁になる（図1）。この蔵馬定局は，「雙陸盤式」後一梁にある白黒各二つの馬を図8のように，前一梁に移動した。ここは馬が「門」を超えて進むことになっている。「雙陸盤式」に書かれている「逢門不作家」，つまり門の場所には馬を置かないという意味から，「門」を一つの梁だと考える。そうすると，五のゾロ目を一個の馬に対して使い，一個の馬が10梁を進めたこととなり，ちょうど図8の配置になる。前一梁には馬が六つ並んでいる状態になる。この盤面図は前後五梁である。



図8 蔵馬定局

### 3.6 他骸（ハイ）定局

図の上部に書かれた文の大意は：骰子の出目が重

紅(四のゾロ目)の時、後一梁の馬を相手の胷の場所に置く(図9)。

『譜雙』によると北方雙陸は後一梁を胷と称する[5]。ここでの他胷は相手の胷を意味する。図9に描かれたように、後一梁にある白黒馬各二つは後四梁に移動したことが分かる。また、白黒馬の配置は「雙陸盤式」の白黒馬の配置とちょうど逆になっている。この盤面図は前後五梁である。



図9 他胷定局

### 3.7 四梁定局

図の上部に書かれた文の大意：相手方の四梁で馬を配置する。骰子の出目が重三の時に、二つの馬を後四梁に置き待機する(図10)。

図10 盤面には「重三は一梁の二つの馬を出すべき」「重三は四梁に置くべき」と書かれている。

「雙陸盤式」の初期配置では、後一梁に白黒馬を各々二つずつ置くが、重三の出目がでた時に、それらが後四梁に移動したことが分かる。また、お互いに相手の梁に置くことから、「他胷定局」とよく似ている。図10は図9と比較すると、図10の「梁標」が図9より一つ少ない以外は、ほぼ同じである。この盤面図は前後五梁である。

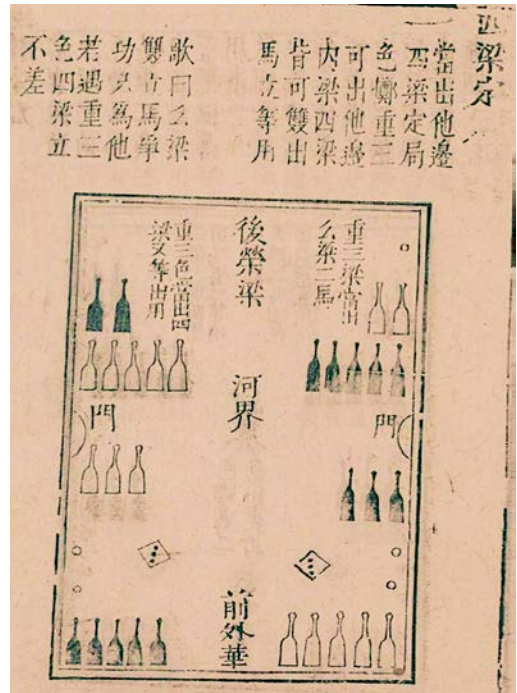


図10 四梁定局

### 3.8 三梁定局

図の上部に書かれた文の大意：骰子の出目が重二の時に、相手の場所に馬を置く。馬二つを三梁に置く(図11)。

図11の盤面上には「么梁両里随色出」「么梁両馬随色出二梁等用」また盤面下部には「擲色重二急出裏馬」の説明が書かれている。

「么梁両里随色出」の「里」を「馬」に置き換えてみると意味が通る。「么梁両馬随色出二梁等用」の文は「二梁」と書いているが、図の上部にある説明文や盤面上に書かれている文の意味から、「二梁」を「三梁」にすると文全体の意味と合う。よって文の大意は「一梁にある二つの馬を骰子の出目に従い三梁に移動する」である。盤面下部に書かれた文の意味は「骰子の出目が重二の時、馬二つを出す」である。

盤面図を見ると、元々内一梁にある二つの馬は、白黒二つ共に三梁に置かれている。文中に「相手の場所に置く」の文言が書かれていたが、「他胷定局」や「四梁定局」のように白黒馬の位置が逆転していない。また、文の中に二のゾロ目と書かれているが、盤面に描かれた骰子の出目は「2, 1」になっている、骰子目の書き方は1の出目の「〇」

は骰子の一面の中央に描くのに対して、この図の「○」がずれている。盤面の骰子の出目は二つとも「2」であろう。この盤面図は前後五梁である。



図 11 三梁定局

### 3.9 二梁定局

図の上部に書かれた文の大意：骰子の出目が么（一のゾロ目）の場合は、相手の二梁に馬をおき、定局とする。盤面上に「色擲雙么出在二梁」「色出争二梁」と書かれている。いずれも、一のゾロ目の場合は馬を二梁に置く(図 12)。

盤面図から、「雙陸盤式」で後一梁にある白黒馬各々二つが後二梁に移動したことが分かる。この盤面図は前後五梁である。



図 12 二梁定局

図 4～図 12 は、国立国会図書館デジタルコレクションより

## 4 「五梁」と「初期配置」の問題

まず、「五梁」の問題を見ていく。『三才図会』雙陸の項に書かれた9枚の盤面図のうち「二梁外華定局」を除いて、「門」を中心に前後に五梁ずつ描かれている。これは今までに分かっている雙陸文献に類のない盤面図とも言える。盤面のデザインは『譜雙』に記載されている北雙陸の盤面デザインと同様であるが、「梁」の名称は異なる。『三才図会』の盤面の前梁後梁は、『譜雙』の北雙陸盤面の前梁後梁と逆になっている(図 1 を参照)。

次は、初期配置を見ていく。『三才図会』のこの9枚の盤面図は、1枚目の「雙陸盤式」が基本的な初期配置だとすると、その他の8枚は骰子を一回振り、その出目で馬の配置を決めている。このような出目によって馬の配置を決めるのは、今までに類がなく、新しい。一方、「蔵馬定局」の初期配置は、前一梁に馬を六つ配置している。一般的な初期配置は一つの梁に置ける馬が最多5個までに対して、「蔵馬定局」はこの決まりを破っている。

## 5 おわりに

『三才図会』は、今までにない情報を提供してくれたと同時に図版と文章において不明な箇所も存在している。今後は詳細な解析や他の文献との比較により、中国雙陸遊戯法、日中盤双六の関連性について検証していく必要がある。

## 参考文献

- [1] 増川宏一, 『遊戯』, 法政大学出版局 (1978), p44
- [2] 木子香, 古代盤上遊戯盤双六の復刻, 大阪電気通信大学人間科学研究第 20 号 (2019), pp1-12
- [3] 木子香, 『譜雙』の日本語訳及び盤双六史に関する考察, 大阪電気通信大学人間科学研究第 19 号 (2017), pp79-94
- [4] 何立民, 「王圻父子『三才図絵』的特点与価値」, 『史林』3 期 (2014), pp54-59
- [5] 洪遵, 『譜雙』, 早稲田大学図書館所蔵 (1846)

付録：各盤面図の上にある文章の意味

#### 雙陸盤式

おおよそ馬の動かし方の順番は骰子で決める。即ち馬の動かし方は一定のルールがあり、勝手に動かしてはならない。

営するのに一定の道理があり、勝手に動かしてはならない。

歌曰く：馬を動かす時は恐れが要らず、時に骰子の出方で勝負が決まり、左南右西は順序に分かれ、上下はあなたの好きなようにすればよい。

#### 外華平満局

前四梁は外華平満局、後の梁は栄梁という。前梁は外華および常作という。骰子の出目が四のゾロ目の時に、四梁にするのがよいだろう。これを外華という。

歌曰く：外華四梁が欠けた時に、ゾロ目の四を得たら、正にそこに配置せよ、他の出方を防ぐため、早目にそう配置した方がよい。

#### 三梁外華定局

前三梁は外華定局とする。三のゾロ目が出た時に、必ず外華三梁に配置し、捕まえるか逃げ出すかを待ち、急に馬が必要な時に備える。

歌曰く：外華を空けずに、馬を置くべき、この時が来るのが待ち遠しい。三のゾロ目は本当に役に立つ、三梁が満ちて気持ちが良い。

#### 二梁外華定局

前二梁は外華定局とする。二のゾロ目が出た時に、必ず外華二梁に配置する。相手の手を防ぎ、己が馬を使う時に備える。

歌曰く：前二梁を補填したい時に、二のゾロ目を得ればよい。相手の出番なら切られるかもしれない、防備するには早めの方がよい。

#### 蔵馬定局

まだ「把門」していないうちに、五の出目が出た時は、馬一つを隠すべし。五つの馬がある前に更に馬を一つ置く、いわゆる蔵馬局。

歌曰く：五六欠けるとき出すべし、遅れないよう

に早々に隠す。

#### 他胘定局

他胘に置くべき。已梁外華が満になりそうな時に、四のゾロ目が出たら、相手の梁に置き、出番を待つ。

歌曰く：相手の胘梁がまだ埋まっていない時、四のゾロ目が出たら、そこに移動することができ、両馬は初めて相手の胘に立ち、その使い道は計り知れない。

#### 四梁定局

相手の四梁に置き定局する。三のゾロ目が出たら、相手の内梁四梁に両馬を移動し、待機する。

歌曰く：一梁に両馬が立ち、それらは勝利に貢献し、三のゾロ目が出たら、四梁に立つのは間違いない。

#### 三梁定局

相手の三梁に置き定局する。二のゾロ目が出たら、相手の三梁に移動し、待機する。

歌曰く：一梁に馬が立っているのは知るべし、早めに進め、遅れることのないように。二梁を占領し出るのを待機、危険から逃げ出そうとしても物事は予測できず。

#### 二梁定局

相手の二梁に置き定局する。已梁曰く満になり、一のゾロ目が出たら、相手の二梁に移動しそこで待機する。

歌曰く：一のゾロ目が出たらすぐに使うべし、二梁に配置するのは知っておこう。使うかどうかは分からずとも、早々に備え、遅れぬよう心掛けるべし。